

## 「神を遠くに感じる時」

聖書はいつの時代でも世界のベストセラーと言われています。その聖書の中で、特別なテーマをもとに書かれている書にヨブ記があります。このヨブ記のテーマは「なぜ義人（正しい人）が苦しみにあうのか」であり、このテーマは人間が抱え続けているテーマです。

私たちが現実の世界を見ます時に「なぜ、自分や家族、あるいは親しい友にこんなに辛く悲しいことが起きるのだろうか」という事に向き合うことがあります。

ヨブ記の主人公、ヨブもそのような境遇に置かれました。聖書によると、彼の人の成り立ちは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかっていました（ヨブ1章1節）。そんなヨブは、ある日を境に全てのものを失いました。すなわち、彼の豊かに祝されていた全ての財産、彼の10人の子供達、妻との信頼関係、そして果てには、彼は自分の健康をも損ない、これらと共に、それまでの自分の名声をも全て失いました。信仰深く、人々から一目置かれる素晴らしい人格も備えていたであろう、このヨブにこのようなことが起きたということを私達はどう受け止めればいいのか。

「神様が遠くに感じられる」。こんなことを感じた方、いないでしょうか。もしかしたら、今、そう感じている方がいるかもしれません。今日はこれらのことに対して幾つかのことを見ていきたいと思うのです。第一のこと、それは「もう一つの世界」ということです。

### もう一つの世界

聖書は「世界」は全て神によって支配されていると記しています。そして、その聖書が言う「世界」には「二つの世界」があります。一つは「私達が生きているこの世界」、そして、もう一つは「私達には見えない世界」のことです。

ヨブがその災いに遭う前に、こんな不思議な話し合いが神様とサタンの間でなされていたことをヨブ記は記しています。すなわち、かいつまんで言いますならば、「ヨブが神を恐れ、悪に遠ざかるのは、神が彼を豊かに祝福をしたからであって、神が彼の所有物や家族、あるいは彼自身の肉体を撃てば、ヨブも神をのろうだろう」（ヨブ1章6節-12節）とサタンに言われた神は「それではそれらのものを全てヨブから取り上げてみよ」と言います。こうして、今、お話ししたような諸々の災いが実際にヨブに降りかかります。言うまでもなくこの神とサタンの会話のことをヨブは知りません。

聖書はこのヨブ記のように、時々、チラツチラッと私達の世界の舞台裏を垣間見せてくれる書物です。例えばヨハネの黙示録12章です。そこには身ごもって

る女が太陽を身にまとい、12の星を冠にかぶり、七つの頭を持つ赤い龍と向かい合っている姿が描かれています。龍は巨大で、尾の一振りですべての星の3分の1を払い落とせるほどで、その女から男の子が生まれたら食いつくそうと、待ち構えているけれど、その子は神の御座に引き上げられたというようなことが書かれています（まさしくその様はSF映画の世界で、私達にはチンプンカンプンな話のように聞こえます）。

学者や説教者はこの箇所について様々な異なった解釈をほどこします。しかし、その多くの者達は、この黙示録12章はベツレヘムにイエス・キリストが誕生したことで、天に引き起こされた神の御使いミカエルと龍に象徴されるサタンとの戦いを示しているという点において同意しています。

すなわち、黙示録12章は私たちの知るクリスマスのもう一つの側面を現しているのです。私たちは飼葉桶に安らかに眠る赤子のイエスと、マリアとヨセフの満ち足りた顔というものをクリスマスとしてイメージしますが、私達がうかがい知れない天においては、実は龍が生まれ来るイエスを食いつくそうとしていたり、マリアを何とか害そうとする様子が表現されているのです。

さらに、これら私達にはうかがい知れない世界についてイエス様が語られた「迷える羊」「落としした硬貨」という有名なたとえ話はさらに天の有様を明らかにしています。これらのたとえには共通点がありまして、それは、どちらにも「罪人が悔い改めるならば、天においては大きな喜びがある」（ルカ15章）ということが記されているということです。そうです、もし一人の罪人が、この地上で心から神に悔い改めるなら、私達の目に見えない世界では、その時に、桁はずれの喜びが起きているというのです。

今日、私達は目に見えない世界を意識することなく日々を生きています。しかし、聖書によれば、人の歴史とは民族や国家の興亡どころの話ではないのです。日本がこうした、アメリカがああ言った、北朝鮮がこんな行動に出たというレベルの話ではないのです。この世界で起きている出来事は（私達はそんなこと夢にも思わないでしょうが）、この私達の日常生活でさえも、見えない世界の戦いや喜びの足場となっているというのです。

この世界に生きた人間ヨブは、見えない世界にその結果が及ぶような試練と向き合うことが求められたのです。このヨブ記のメッセージは私たちの信仰には実は大変な意味があるということに気がつかせてくれます。私達がこの地上で向き合う事がらとそれに対する私達の応答は、実はとてつもなく重大なことなのだという事を伝えているのです。

パウロはこのことをよく理解していたのでしょう。エペソ書6章12節でこう言いました「わたしたちの戦いは血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、闇の世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」

そう彼が信仰ゆえに戦っている戦いとは目の前にいる迫害者とか敵に対する戦いのみならず、それは闇の夜の主権者、天上にいる悪の霊に対する戦いだと言ったのです。

神がヨブについて天で悪魔と語り合ったことは、時に私達の信仰生活の中にも起きていることなのかもしれません。私達が「神の御心が天になるように、地にもなりますように」と主の祈りを唱えるように、神の御心が、私達を通して、この地でもなるようにと神は私達をこの地に置いているからです。パウロはそのことに目が開かれていたのでしょうか、コリント第一の手紙4章9節において大胆にこう言いました。「私たちは、全世界に天使にも人々にも見せ物にされたのだ」。

そうです、私達の世界に起きていることとは、もう一つの世界と関係があり、神様はこちらの世界に生きる私達を見守っておられるのです。次のことをお話ししましょう。それは「神は私達の人生を知っている」ということです。

神は私達の人生を知っている。

詩篇139篇2節—4節にこんな言葉があります「あなたはわが座るをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもるもの道をことごとく知っておられます。わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます」。

私達の信仰が天とは無関係ではないということを私達は確認しました。ここでさらに確認したいことは、天の御座におられる神様は、その時々私達の思いをわきまえてくださるということです。

この箇所を英語の聖書で見ますと「familiar」とか「perceive」という言葉が使われています。これには「熟知する」、「精通する」、あるいは「理解する」という意味があります。すなわち、神様は私達をただ漠然と知ることではなく、私たちの思いを熟知してくださる。理解してくださるということがここにおいて言われているのです。

神様は私達が座っている時も、立ち上がる時も、歩んでいる時も、また床に伏す時にも私達の思いを理解しておられるということです。驚くべきことに私達が一言も自分の気持ちを説明せずとも、神様は私たちを理解して下さるのです。

すなわち、具体的にこんな言い方をすることができるかと思います。愛する者たちが病院の病室で病と戦っている。その病室の廊下の椅子に座り、色々な心配が頭をよぎる、その時の私たちの心を神様はよくよく理解して下さる。

会社のオフィスで色々なプレッシャーに悩んだり、失敗してしまったことに対して色々なことを思いめぐらす。そして、でもこうしてはいられないと、自分を震い立たせて椅子から立ち上がる、その瞬間の気持ちを神様は熟知して下さる。どうしても行きたくない場所に行かなければならない。そこに行く事によって、何を言われるか分からない。そんな道すがらを歩く私たちの心を神様は知っていて下さる。

そして、色々な心配を抱えたまま、ベッドに伏し、眠れない夜を悶々と過ごす。考えが全て否定的に思えてきてしまい、心配が新たな心配を引き起こしてしまう、その時、神様は私たちの心を知っていて下さいます。

私達は思うことがあるかもしれませんが。私のことなど分かっていてくれる人などはいない。私を理解していてくれる人なんかはいるはずもない。もっと言いますと、自分自身ですらも自分のことが分かっていない。

まさしく、この気持ちはあのヨブが持ち続けた気持ちであったに違いありません。ヨブの妻は彼の気持ちを理解せず、彼を訪ねてきた友人たちも彼を理解していなかったことがヨブ記からうかがい知れます。

しかし、そんな人から分かってもらうことのない人生、そして自分ですらも把握すらできない自分の人生をこちらが一言も言っていないのに、ことごとく全てわきまえていて下さるお方、それが私だと神様は言われるのです。

人生の歩みにおいて、悩みを抱えて暮らしていた時に「この問題を知っていてくれる人がいる、理解していてくれる人がいる。そのことが心の支えとなっている」。そんな経験をしたことがある方いませんか？そうです、神様は私達を熟知し、理解して下さるお方です。

そして、それだけではありません。神様は私達の人生に対してエレミヤ29章11節においてこう言われています「主は言われる、わたしがあなたがたに対してに言っている計画はわたしが知っている。それは災いを与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」。

この言葉の中に私達は否定的なものを見出すことはできません。神様は私達の全て言動を知り、理解しているのみならず、その言動の集大成である私達の人生に対してに言っている計画を知っていて下さるというのです。そして、それは本来、私達に災いを与えようとするものではなくて、平安を与えようとするものなのだ、あなたがたに将来を与え、希望を与えるものなのだというのです。

この私達の人生の計画ということに関して、たとえそれが自分の人生であっても、それを見通したり、予定をたてることにおいて限界があります。しかし、主はそ

の計画を知ってくださるというのです。このことを踏まえて、こちらの世界とあちらの世界とはつながっているのです。最後のことです、それは神はあなたを愛しているということです。

### 神はあなたを愛している

ヘブル人12章5節―8節にはこのような言葉があります「⑤ また子たちに対するように、あなたがたに語られたこの勧めの言葉を忘れて、「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけません。主に責められる時、弱り果ててはならない。⑥ 主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである」。⑦ あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子があるだろうか。⑧ だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられないとすれば、それこそ、あなたがたは私生子であって、ほんとうの子ではない」。

人によって、ここに書かれている「訓練」は色々な言い方がされます。それを「躰」と呼ぶ人もいるでしょうし、「試練」と言い換える人もいるでしょう。当人としたら「躰」も「試練」も、すすんで喜んで受けたいと思うものではないかもしれませんが。自分の思い通りにならないことや痛みがそこにはともなうからです。

しかし「そうか、そうか、じゃ、これらの訓練は免除してあげるから、楽しく生きていきなさい」ということが、その人のためにならない、いや、もしかしたらその人を本当に駄目にしてしまうということを私達は経験を通して知っています。

子に対する親の愛が「無条件で抱きとめる愛」と「その子のために訓練を与える愛」によって完全になるように、父なる神の愛も、神様が私達の真の父であるがゆえに、時に私達に訓練を与えるのです。そして、その訓練を通して私達はそれまで気がつかなかったような大きな収穫を得るのです。

預言者エレミヤはイスラエルが荒野をさまよった時のことについて、神の視点を書き残しています。イスラエルの民にとりまして荒野をさまようということは試練以外のなにものでもありません。しかし、神の視点は異なります。

主はこう言われる、「つるぎをのがれて生き残った民は、荒野で恵みを得た。イスラエルが安息を求めた時、主は遠くから彼に現れた。わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた（エレミヤ31章2節―3節）

先にお話ししましたように、私達が直面するこの試練は地上の世界だけに関わる出来事ではなく、実は天において神様や御使い達の見守りの中で進行しているのです。神はその私達を限りなき愛をもって愛しておられ、絶えず、私達に真実を尽くしてきてくださっているのです。世の多くの宗教は荒野にとどまらずに、そ

2018年8月26日「神を遠くに感じる時」

こから逃れさせることをうたい文句としていますが、聖書の神はその荒野の中であるからこそ得ることができる神の恵みを約束させる神なのです。

そして、これらから分かることは、私達を見守るお方は、私達の全てを知っていてくださるゆえに、私達が乗り越えることのできない試練を私たちに与えることはなさらないということです。

神様がヨブに与えた試練はヨブに与えられたのであって、他の人間であれば、それは耐えられないものであったに違いありません。しかし、神様はヨブを信頼しておられるゆえに、「ヨブならこの試練を乗り越えられるに違いない」という思いを持っておられたことがヨブ記の中で伺い知ることができるのです。

同じように、もし私達が受ける試練があるとするならば、私達の全てを知られる神様は、私達が乗り越えることができる、そして、それによって私達が平安と将来と希望を得ることができるような試練をお与えになるお方です。

その約束がコリント第一の手紙10章13節になされています「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」

神様は私たちが耐えられない試練に合わせることはないばかりか、ちゃんと、その試練を乗り越える道までも備えて下さるということです。そして、その試練は無意味なものではなくて、そこから得ることができる大切なものがそこにはあるのです。

これらをふまえて神様は私達を訓練して下さる。自分の子供が5歳なのに、訓練と言って10マイル走るように強制する親はいません。その子供のことをよく知っている親であるならば、その子が乗り越えられる訓練を選ぶはずです。そして、その訓練を通して、その子が獲得できるであろうものがあるゆえに、親は子に訓練を与えるのです。

幼い子供に小銭を持たせて一人で買い物に行かせるという「はじめてのお買い物」というテレビ番組が日本にはあります（アメリカで同じことをしますと親は逮捕されます）。その子にとって人生、初めての買い物。カメラがその後をこっそりと追いかけるのです。幾つかの角を曲がり、目的の商店街にある魚屋と豆腐屋に子供はお金をしっかり握り締めて、母親に言われたものを、勇気を出して店員に聞いて、ちゃんとお金を払って、商品を持って家に帰ってくるということです。

しかし、途中で道が分からなくなったり、何を買っていいのか分からなくなったり、お金が勘定できなかつたり、不安になって涙が出てきてしまったり、それはそれは、その子にとって大きな試練です。でも、この子がこの買い物で学ぶことは、この子にとって大きな財産となることでしょう。時に番組の中で子供が不安

になってしまって、泣き出して一歩も動けなくなって、しゃがみこんでしまったことがありました。もう絶対絶命に思えました。その時、番組のスタッフは、通りすがりの人を装い、この子をさりげなく助けたのです。

さらにカメラは一部始終、背後で分からないように子供を撮り続けています。周りにいる道すがらの人達の中にもテレビのスタッフがいて、その子を見守ります。それを見るテレビの視聴者もこの子が達成しようとする姿を固唾を飲みながら見守ります。思わず「がんばれ、もう少し！」と心の中で叫ぶのです。

でも、そんな人達の中で誰よりもドキドキしながら、手に汗握りながら、画面を見ている人がいるはずです。そうです、その子の親です。この親はカメラマンが隠し撮りしている我が子の言動を全て知っています。ですから、我が子の言動次第では、今でも飛び出していきたい、助けてあげたい、でも、踏みとどまる。なぜなら、こう思うからです。「子よ、大変なことを、君は今しているけれど、そこから得るものはとてつもなく大きなものだよ。そして、君ならそれが出来ることを、君を一番、よく知っている私は知っているよ」。

この親は子供から遠く離れているのでしょうか。いいえ、彼らは子供の言動を全て知り、その場にはおらずとも、この親の心は子供の心と一つなのです。同じように私達が立つのも、座るのも、伏すのも知り、私達の益となるために神様は私達に必要な経験をさせてくれます。その経験から与えられる気づきは私達の宝となります。私達が普通では気がつかない、最も大切なことを知らせてくれます。

そのチャレンジは私達が超えることができないものではなく、その要所、要所で私達に必要な助け、それは誰かのアドバイスであったり、必要な人を送ってくれることによってなされます。こうして私達の生涯に対する神の御計画は一つ一つ成就していくのです。

私たちは神の作品です。その作品は誰にも目をかけられず、箱に入れて、封されているというようなものではないのです。神様はこの作品の心を理解して、その作品にとって最善の計画を成就しようとしてくださり、それを世に示します。そして、この私達の地上での歩みは天と断絶しているものではなく、私達の言動は天の悲しみ、喜びとなります。

神を遠くに感じられる時・・・、私達の側ではそのように感じるような時があるかもしれません。しかし、私達が神の御前に隠されていることはなく、私達が経験する出来事は天と無関係ではなく、その神は私達の状況を知り、理解し、見守り、私達の生涯に本当の平安と希望を与えるために、必要な経験を今も与えてくださっているお方なのです。そう、神は遠くにおられるのではない、私達と共に今もおられるのです。このことを胸に刻み、この週も歩んでまいりましょう。お祈りしましょう。